

テラスハウスの外部空間の形態特性に関する研究

－阿佐ヶ谷住宅を事例として－

日大生産工(院) ○小林 麻梨菜
日大生産工 曾根陽子

1. はじめに

阿佐ヶ谷住宅は1958年(昭和33年)に日本住宅公団により開発された分譲型集合住宅である。地上3～4階建ての鉄筋コンクリート造の118戸と、地上2階建てテラスハウスタイプの232戸で構成されている。全体の基本計画を公団の設計課が行い、テラスハウスの一部を前川國男建築設計事務所が設計するという建築家と公団の共同で行われた先駆的実例でもある。(図1)

阿佐ヶ谷住宅が建設されてから50年がたちテラスハウスは設計者の計画とは意図しない所で変化に富んだ空間を住人が自ら作り上げている。本研究はこの阿佐ヶ谷住宅独自の境界面に着目し、用途による境界面の構築のされ方を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象地区の概要

2.1 住戸計画

阿佐ヶ谷住宅は「個人のものでなく、パブリックな場所でもない、得体の知れない緑地のようなもの(＝コモン)を、市民たちがどのようなかたちで団地の中に共有することになるのか」¹をテーマに作られた。そのため敷地の中央などに大小の広場が設けられ、各棟は十分な間隔がとられており、ゆとりのある配置がなされている。広場や棟の間には50年の歳月をかけて豊かな緑が形成されている。これらの樹木は計画後に杉並区による植栽活動によって7回にわたり植えられたものと住民らによって植えられたものがある。これらの管理は管理組合が行い定期的に剪定・伐採を行っている。

テラスハウスは4戸から6戸の住戸が東西につながり1つの棟をなし、少しずつずれたり傾きを変えながら配置されている。各住戸には専用庭が設けられ、ほとんどの住戸で増改築が行われている。庭は各自で管理し、多様な景観を生み出している。

2.2 テラスハウス

テラスハウスは連棟長屋と呼ばれる形式で各住戸が地面に接し、水平に連続した接地型集合住宅である。日本にも長屋形式の住戸形態は存在するがここでは住宅がすべて南面して並んでいる。この配置計画は当時の公団の標準的な計画に従った為である。構造については外壁が耐久性のある素材で作られ、内部の間仕切り等は木材を主としたやわらかい素材でつくられており住み手のライフスタイルに合わせて間取りを変化できる(スケルトンインフィル)プランとなっている。

2.3 再開発について

阿佐ヶ谷住宅は、狭さ、老朽化、設備が現代の生活水準に達していないなどの理由から1984年に再開発が決定し、1986年に再開発の具体的な計画が持ち上がった。しかし、阿佐ヶ谷住宅は全体を一団地として認定されていることから現状維持、もしくは全面立て替えのどちらかしか認められておらず、所有者全員の同意が得られず現実には至らなかった。現在は各住戸の立替に関する合意が得られ阿佐ヶ谷住宅組合が組織する住宅再開発委員会が中心となり改築計画が進められている。しかし住民らの計画案に対する反対により計画が大幅に遅れているのが現状である。

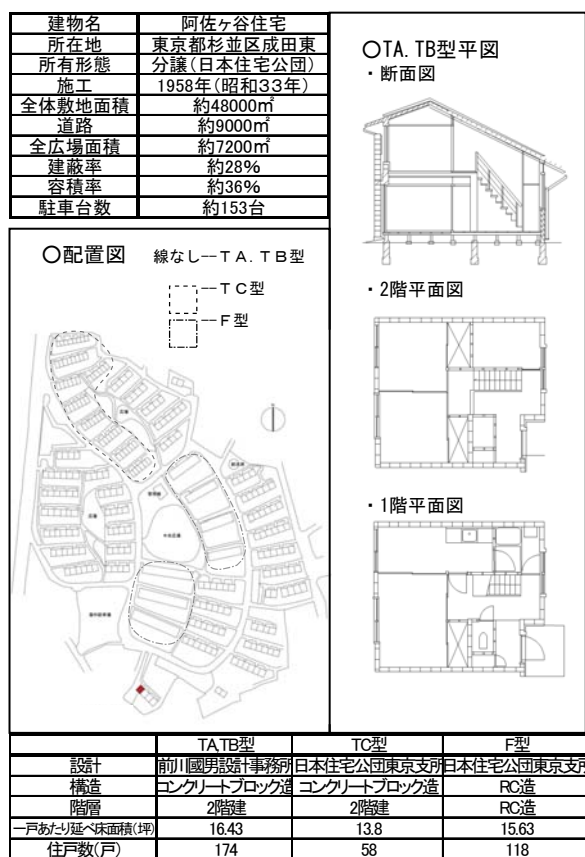


図1 阿佐ヶ谷住宅の概要

3. 調査方法

今回は住戸のエントランス側と専用庭の境界面に着目して調査を行った。エントランス側の境界面を(a)庭側を(b)とし庭同士、エントランス同士など同じ属性同士で接している境界面を(1)庭や歩道、エントランスや歩道などの違う属性が接している境界面を(2)とした。またエントランスは住戸の出入口が接している面(a)とそうでない面(a')とで区別した。(図0)

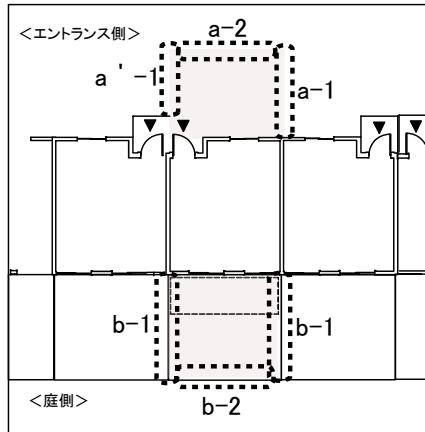


図2 境界面の分類

調査対象はまだ住民が多く住んでいる西側エリアから無作為に40戸を選び出し、それぞれの境界面に置かれているものについてカウントした。

4. 調査結果

4.1 エントランス、庭による設置物の比較

エントランス側(a)と庭側(b)にそれぞれ置かれたものの内訳を比較すると(図3)庭側はコンクリートブロックやフェンスなどの面的なものが多く、エントランス側では逆に面で境界を区切ることはほとんどなく自転車や鉢植えなどの私有物が置かれることが多かった。置かれる物の高さに関しては庭側は腰の位置程の高さものがほとんどで、エントランス側はまばらであった。

4.2 エントランス側による比較

エントランス側を詳しく見てみると(図4)出入口から離れたところにある境界面(a-1)については出入口に面した境界面(a'-1)に比べてどの大きさの草木についても数が多くなっており、私有物で区切る行為はあまり見られなかった。a-1に見られる草木は自然に生えた草木であると考えられる。a'-1ではa-1に比べ石(花壇の石やブロック石)や鉢植えなどの私有物の数が多く境界が明確に築いていた。また草木もよく手入れされているものも多かった。a'-1では近隣を意識する出入口があるため境界の築きが見られるが、a-1ではあまり境界としての認識が低いことがわかる。ただしエントランス側でガーデニングなど庭のように利用する住人においてはa-1で明確な築きが見られた。

4.3 庭側による比較

庭については(図5)庭を囲むものとしてはフェンス(多くはつたがからまっている)やコンクリートブロックが多かった。これは個人で取り付けられたものや、増築の際に両となりの住民と共同で設けたものもあり、共同で取り付けられたものは統一された景観となっている。ほとんどの住戸で増築を行っており、中には境界義理きりまで増築している住戸もある。高さに関してはフェンスや樹木は目線の高さよりも腰までの低いものの方が多く見られた。

4.4 道路に面した境界面の比較

a-1では、b-1と比較すると面的な要素がないためかたよったものとなった。(図6)

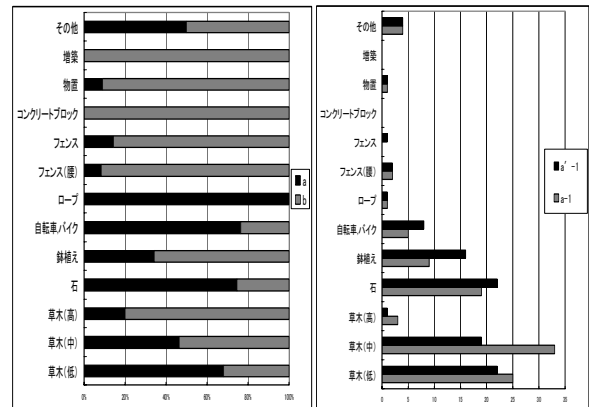


図3 エントランス、庭における設置物の比較

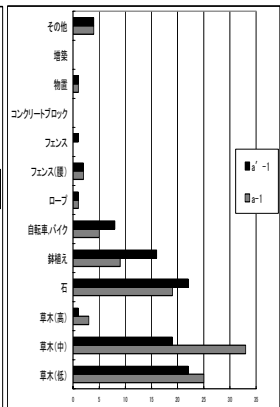


図4 a-1, a'-1における設置物の比較

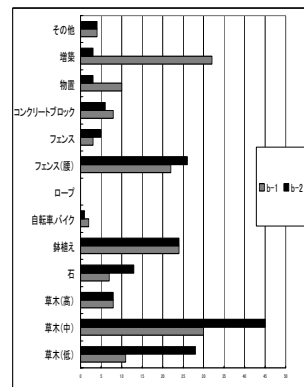


図5 b-1, b-2における設置物の比較

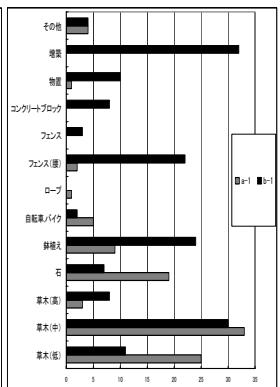


図6 道路に面した境界面の比較

注釈

- 1) 日本住宅公団、津端修一、市民の庭になるコモン、集まって住む風景
- 2) 増築は本屋外壁より増築壁の中心までは2平米以内とする(平成4年度建築協定より)

参考文献

- 1) 住宅建築1996年4月号、東京理科大学初見研究室「阿佐ヶ谷住宅物語」
- 2) 松井溪、大月敏雄、松本真澄、深見かほり、日本住宅公団阿佐ヶ谷住宅の管理・運営の実態に関する考察、日本建築学会学術講演更概集、2008年9月
- 3) 青木正夫、武田、2層テラスハウスの住まい方研究(1)-特に就寝について-日本建築学会論文報告集 第57号昭和32年7月
- 4) 杉並区都市整備部まちづくり促進課、成田東四丁目(阿佐ヶ谷住宅)地区地区計画の導入についての説明会資料
- 5) 山口泰作、阿佐ヶ谷住宅における住み手と使い手の関係、2005年芝浦工業大学卒業研究